

八幡縁起絵巻と『八幡宮寺巡拝記』

筒井大祐

序

一・問題の所在

二・八幡縁起絵巻の詞書について

三・八幡縁起絵巻の依拠資料について

四・『八幡宮寺巡拝記』以外の依拠資料をめぐって

神功皇后と応神天皇の事跡を中心に描いた八幡縁起絵巻は、八幡信仰の拡大に伴い、大量に制作され、伝播したようで、現存する諸本も多い。本稿では、これら広範に流布した八幡縁起絵巻の展開を考察するための基礎研究として、詞書の依拠資料について検討した。その結果、八幡縁起絵巻の詞書の依拠資料の一つに、八幡宮関係の説話を集成した『八幡宮寺巡拝記』を指摘した。また、『八幡宮寺巡拝記』に依拠しない八幡縁起絵巻の詞書部分に関しても、八幡縁起関係の周辺資料に縁起絵巻との共通伝承を見出した。

序

神功皇后の三韓出兵と、応神天皇が八幡大菩薩に化現して靈験を示す、いわゆる八幡信仰をめぐる伝承は、八幡信仰の基盤をなすものであり、その伝承を描いた八幡縁起絵巻も多数、現存している。この八幡縁起絵巻は八幡信仰の隆盛に伴い、大量に制作、享受されたようで、現存する諸本も多く、八幡信仰の拡大に大きな役割を果たしたと見られる。しかし、このように八幡信仰と密接に関わる八幡縁起絵巻ではあるが、現存諸本が数多く紹介されているにも関わらず、その成立を含めた基礎的な問題については未だ十分には解明されていない。そこで、本稿では広範に伝播した八幡縁起絵巻の成立、展開をめぐる研究の基礎として、八幡縁起絵巻の詞書の成立を、依拠資料の面から明らかにしたい。

一・問題の所在

八幡縁起絵巻（以下、縁起絵巻。）は、神功皇后の三韓出兵と、応神天皇が八幡大菩薩へ化現して靈験を示すという物語を中心に描くが、その中には、称徳天皇と道鏡の皇位継承問題に関わり、八幡大菩薩が和氣清麻呂に託宣を下したとする、有名な和氣清麻呂伝承（以下、清麻呂伝承。）

も含まれる。道鏡の皇位継承に関して、八幡大菩薩が清麻呂に託宣を行った事件は、『続日本紀』や『和氣清麻呂伝』などにも記載される一方、「和氣清麻呂為勅使参宇佐宮事被書絵詞」（以下、「清麻呂絵詞」）という絵を伴った物語の制作も行われたようである。この「清麻呂絵詞」は現存しないが、宇佐神宮の社僧であった神昨が編纂した「宇佐宮託宣集」^②巻九に、詞書のみ所収されており、これにより、その内容は確認できる。なお、「宇佐宮託宣集」所収の「清麻呂絵詞」の詞書は、後白河院の時代に蓮華王院の宝蔵に納められたものを、宝治年間（一二四七—一二四八）に写したものだという。

このように、さまざまな資料で語られる清麻呂伝承だが、その伝承は皇位継承という国家の重大事に八幡大菩薩が威徳を示した例として、八幡大菩薩の靈験を記した鎌倉期成立の『八幡愚童訓』（以下、『愚童訓』）にも見えており、その内容は縁起絵巻の清麻呂伝承と類似する。

この『愚童訓』には、同じ書名だが内容の異なる二種類のものがある事が知られ、巻首に「降伏事」と小題を付し、異国襲来を中心に記す甲本と、「垂跡事」や「名号事」など、全体を十四条に分けて八幡信仰について記す乙本とにそれぞれ分類される。この両本の関係を、西田長男氏^③は「いずれもその述作の年代を等しうし、作者もまた同じ石

清水八幡宮の関係者であろう」と述べた上で、「元来はいわゆる不分巻であつたものを、大巻であるところから、分冊したために、ついに別本のようになつてしまつたものであるまいかと思われる。」とされ、現在のように、甲本、乙本と別本として取り扱われていたのではなく、石清水八幡宮周辺で、もともと一対のものとして編纂されたものであると推定された。

ところで、この清麻呂伝承は『愚童訓』の両本に見えるが、甲本と乙本では、その記し方が異なる。甲本では、道鏡の皇位継承問題から清麻呂の配流まで、清麻呂伝承の内容を比較的詳しく記している。しかし、乙本では、その伝承を断片的に記しており、「遷座事」には、八幡大菩薩が清麻呂へ「男山に神宮寺を建立すべし」との託宣を受けた事のみを記すが、乙本の一本である京都国立博物館蔵『八幡宮愚童記秘卷』⁽⁴⁾などでは、この託宣部分に甲本と同じ清麻呂の配流伝承を、「巡拝記云」として、『愚童訓』に先行して成立した『八幡宮寺巡拝記』(以下、『巡拝記』)を引用して増補している。⁽⁵⁾

『巡拝記』の内容については、近藤喜博氏⁽⁶⁾が、宇佐・香椎・宮崎・石清水の四所の八幡宮の縁起・霊験・異聞等を仮名文を以つて綴り、その祭神・本地仏、或は八幡の名の所以などを、仏説を交へて説くのであ

つて、処々に日本書紀・諸社の縁起流記・諸寺の縁起等を引用する。本書の主たる標目と置いたところは、本地垂跡を顕著に説くとは云へ、八幡宮の衆生に垂れ賜ふた並びなき霊験を語るに置かれてあつた。

と、宇佐をはじめとした八幡宮の縁起や霊験を、日本書紀や諸社寺の記録を交えながら、衆生に八幡宮の信仰を説く目的で編纂されたと指摘された。また、その成立年代を内部徴証から、

文永弘安の役にたのまれた八幡の霊威について全く筆にせず、して見れば、弘長年間以後、文永八年の蒙古襲来以前の四五年間に成立した、とすることが妥当な成立年代とされよう。

と、弘長元(一二六二)年から、蒙古襲来以前の文永八(一二七一)年以前の四、五年、つまり文永四(一二六七)年の間とされた。

新城敏男氏も『巡拝記』が蒙古襲来に触れていない点から、「本書は弘長年間(一二六二―四)から文永五年(一二六八)頃にかけてなつたものと考えることができるかと思う」と述べられ、その成立年代を弘長年間から文永五年の間と、近藤氏とほぼ同じ年代を推定されている。また、その編纂された場所については、「その主とするのは石清水であり、編纂も石清水でなされたであろう」とされた上

で、編纂目的を、「八幡とりわけ石清水中心の説話集成にあって、それを説教・唱導などの素材として用いるための基礎作業の一環であったのであろうか」と、『巡拝記』を石清水八幡宮で、説教・唱導などの布教のために編纂された説話集と位置づけられたが、『巡拝記』はあくまでも集成の一段階にすぎず、それによってどのような布教がなされたのかまでは明確にしえない」と、その利用の実態は不明とされている。

このように八幡信仰の基礎資料を集成して編纂された『巡拝記』に所収される清麻呂伝承と、縁起絵巻の清麻呂伝承は共通する部分が多い。両者の清麻呂伝承の共通点を確認するために、対照表1に『巡拝記』と縁起絵巻の清麻呂伝承を挙げ、比較のために『宇佐宮託宣集』所収の「清麻呂絵詞」の詞書も示した。

対照表1で示したように、「清麻呂絵詞」では、道鏡によって足を切られた清麻呂の配流場所を、破線部a「よるすちをたちていよの国になかしつかはし」と、「いよの国」とするが、『巡拝記』と縁起絵巻は、ともに傍線部aのように、足を切られてうつろ船に乗せられた清麻呂が、傍線部bで示した部分、『巡拝記』では「宇佐ノ宮チカキワヘノ、ハマ」、縁起絵巻では、「豊前国和摩ノ浜」と、宇佐宮の近くへ漂着したとする。また『巡拝記』と縁起絵巻

は、宇佐宮に近い浜に漂着した清麻呂が、「シシ」（猪、鹿）に乗り、宇佐宮へ参詣し、傍線部c「二心ナク」八幡大菩薩に祈念すると、「御殿ヨリ五色ノ蛇」が出現し、清麻呂の切られた足を「ネフル」と、足が「モトノ如ク」なったとする、清麻呂の切られた足が治癒したという霊験の内容が一致している。これと比較すると、「清麻呂絵詞」では破線部cのように、八幡大菩薩へ祈念すると、清麻呂の足は自然に治癒したといい、『巡拝記』や縁起絵巻の霊験とは異なっている。

対照表1に挙げたそれぞれの資料の比較から、縁起絵巻と『巡拝記』が同一の清麻呂伝承を有しているのは明らかである。本稿では、この縁起絵巻の清麻呂伝承が『巡拝記』と共通する点を端緒として、『巡拝記』が縁起絵巻詞書の依拠資料である事を指摘したい。

二・八幡縁起絵巻の詞書について

さて、縁起絵巻の詞書の依拠資料を検討する前に、縁起絵巻は広範に伝播する中で、詞書や挿絵に改変や増補が加えられ、伝本により詞書や挿絵が異なっている場合があるので、これら伝本の違いを確認しておきたい。これらの伝本の違いについては、宮次男氏が、詞書、挿絵の比較から、大きく甲、乙の二系統に分類されたが、この両系統を分類

対照表 1

「清麻呂絵詞」	『巡拝記』九話	縁起絵巻 下巻・第四段
<p>からめよせて a よをろすちをたちていよの国になかしつかはしつ。清麻呂なかれてかなしかりけるまゝに。宇佐宮の御方にむかひて手をすりて申さく。仰のまゝにまいりて奏したりとて。かゝるかなしきつみになんあたいたる。大菩薩たすけ給へとて。こゑをはなちてなきければ。にはかに託宣し給はく。</p> <p>清麻呂はあやまちたる事もなし。よこさまにぬす人のためにつみせられたる也。すみやかにこれよりむかふにつかいをと仰せられければ。b 宇佐より人みてむかへてなんみてまいりける。c よろこひてまいらんと立ければ。よをろもとのことくつかれにけり。</p>	<p>天皇モ又ニクミテ、a 清丸カ足ヲ切テ空船ニ入テ海ニハナツ、夫カナシムコト詞ニタラス、只タノム心ハ一心ニ大菩薩ニ祈念シ奉ル斗也、此船b 宇佐ノ宮チカキワヘノ、ハマヘヨセラル、何ヨリカ来ケン猪来テ船ニソヒテ立リ、清丸コノシ、ニ乗ヌ、タ、チニ宇佐ノ宮ノ南楼ノ中ニ入ニケリ、悦テ化現ノシ、也ト思ヒc フタ心ナク歎申ニ、御殿ヨリ五色ノ蛇出テ清丸ヲネフルニモトノ如ク足ナリ、</p>	<p>忽ニ御不審アテ a 足ヲ切テ虚船ヲ造テ此清丸ヲ入テ海中ニハナタレキ而ニ此ノ船波ニタ、ヨイテ七日七夜ト申ニ</p> <p>b 豊前国和摩ノ浜ト申所ニイタリヌ其所ニ忽ニ鹿出来テ清丸ヲ乗テ彼大菩薩ノ御宝前ニ参ヌc 二心ナク祈念シ奉ル其時ニ御殿ヨリ五色ノ蛇出テ清丸ヲネフルニ足モトノ如クイテキヌ</p>

する縁起絵巻の構成上の大きな違いは、乙類本の冒頭部分に、甲類本には描かれない異国からの塵輪襲来伝承が描かれる点にある。

乙類本は、足利義教が永享五（一四三三）年に、石清水、宇佐、菅田の各八幡宮に奉納した縁起絵巻を嚆矢とするが、その乙類本の特徴である冒頭の塵輪襲来伝承が、『愚童訓』甲本からの影響である事は、久保田収⁹⁾氏が指摘され、また

宮氏も乙類本と『愚童訓』甲本との共通点を述べられた上で、甲、乙の二系統の縁起絵巻の詞書について、次のように結論付けられた。

甲類本の詞章の中には、「或縁起云……………」、「日本記云……………」、「或説云……………」、「扶桑記云……………」として、原史料からの引用文が挿入された所があったり、また、内容的に重複する箇所も指摘される。これは要

するに、甲類本詞章が未だ十分に整理されていないことを物語る。……これに対し、乙類本では、詞章の構成も論理的に行われており、絵も詞内容を忠実に描いたものとなっている。こうした両本にみる相違は、両本の前後関係を推定する依り処になるもので、甲類本が先行し、それにもとずいて乙類本が再編成されたと推定できるのである。その間、詞章において、『八幡愚童訓』によって甲類本の詞章が増補改訂されたことが推察されるのである。

宮氏は、乙類本の詞書は、先行して制作された甲類本の詞書を『愚童訓』甲本によって再編成して成立したと述べられ、甲類本の詞書は、乙類本のように整理されていないとされる。その根拠として、甲類本には「或縁起云」や「日本記云」などと、「原史料からの引用文が挿入された所」がある点を挙げて、甲類本の詞書が直接、それらの原史料を引用したために、未整理であると見ておられる。また、宮氏は両系統の縁起絵巻の成立年代を、甲類本については、

すなわち

惣へテ宝社造営ヨリ以来タ、三百余歳ニ及へリ。

とあり、宝社すなわち箱崎宮の社殿は、同段詞書に、延喜二十一年（九二一）に託宣があつて社殿を造営す

るに至つたと述べられているから、それより三百年後の西暦一二二一年以降、若干年のうちに成立したと考えることができるのである。

と、甲類本詞書の筥崎宮の創建をめぐる伝承の中に、創建の年号として「延喜二十一年」とあり、その創建から「三百余歳ニ及へリ」と記しているので、筥崎宮が創建された延喜二十一年（九二一）年から三百年後の「一二二一年以降、若干年」を甲類本の成立年代と推定され、乙類本の成立は、その詞書に塵輪襲来をはじめとして、『愚童訓』甲本からの影響が見られるので、『愚童訓』甲本成立後の、延慶元（一三〇八）年から文保二（一三一八）年以降とされた。

この宮氏の論考に対して、金光哲氏は縁起絵巻の甲類本に記される、平時平による筥崎宮創建伝承の萌芽が、縁起絵巻成立以前に編纂された『諸縁起』に既に存在する事を指摘された上で、次のように述べられた。

『諸縁起』の成立が、ただちに「平時平」譚の成立を示すものといえない。依拠した「素材」を意味するにすぎない。……「平時平」譚と同じく、甲類を構成する「干珠満珠」譚、「新羅国ノ大王ハ日本ノ犬ナリ」譚、「応神胎内指揮」譚等の基本的な内容も、『諸縁起』に見られる。しかし、それぞれの成立と変容を考慮して、「平時平」譚の成立が、「一二二一年以降、若

千年のうち」(宮次男論文)に成立したものと信じがたい。……つまり、「平時平」譚をふくむ甲類全体の成立は、『八幡愚童訓』甲の成立後と考える。

金氏は、甲類本を構成する伝承の多くが、鎌倉期に各地の八幡宮の縁起を集成した『諸縁起』に所収されていると指摘された上で、『諸縁起』所収の伝承が縁起絵巻の伝承とは異なっており、それらの伝承の「成立と変容を考慮して」、縁起絵巻で語られる伝承の成立は、『愚童訓』甲本の成立後とされ、乙類本だけでなく、甲類本も『愚童訓』甲本の影響を受けて成立したと述べられる。また縁起絵巻の「人間ノクルシミハ我苦也」とする文言が、『愚童訓』甲本の「民ノ苦ハ我苦ニアリ」と共通している点を挙げ、
「平時平」譚の成立が、『八幡愚童訓』甲からも影響を受けたことを示すものであろう。

ともされる。しかし、金氏は言及されていないが、「干珠満珠」や「新羅国ノ大王ハ日本ノ犬ナリ」などの伝承は、『愚童訓』甲本に先行して成立した『巡拝記』にも見えており、金氏が『愚童訓』甲本と共通するとされた「民ノ苦ハ我苦ニアリ」という文言も、『巡拝記』四話に「民ノクルシミハ我クルシミ也」とあるので、必ずしも縁起絵巻甲類本の伝承が、『愚童訓』甲本の影響を受けて成立したとはいえない。

また新聞水緒氏は、縁起絵巻が『巡拝記』三話、七話と同じ伝承を有する事を指摘された上で、甲類本(一類本)と乙類本(二類本)の詞書について、次の四点にまとめられた。¹⁾

1 一類本には様々な説話伝承が取り込まれ未整理の部分があるが、二類本は一類本をもとに、愚童訓甲本の記事を採用しながら整理した跡が見られる。その際二類本には、独自の判断で補足整理した部分がある。

2 一類本は八幡宮巡拝記と、二類本は八幡愚童訓甲本との共通説話を持つ。

3 一類本は説話的興趣に富む話や民間伝承を多く採用し、二類本は八幡宮伝承のより本来的な形を目指す傾向がある。

4 一類本は素朴な地域伝承を未整理のまま多くとりこんでおり、地域的な教宣の場との関係が窺われる。二類本は和歌や故実などを知る社会の上層で制作されたもので、その内容は神前に奉納されたものという性格に規定されるところが大きいと思われる。

新聞氏は、『愚童訓』甲本により整理され、神前に奉納する目的で社会の上層で制作されたと思しい乙類本の詞書

に比べ、甲類本の詞書は、『巡拝記』との「共通説話」を持つが、その他に、さまざまな説話伝承や民間伝承を取り込み、地域的な教宣の場との関係が窺えるものの、宮氏と同じく、全体的には「未整理」の状態であるとされた。但し、新間氏は甲類本の詞書が『巡拝記』と共通説話を持つと述べられたが、甲類本と『巡拝記』との直接的な関係については明確に言及されていない。

ところが、縁起絵巻と『巡拝記』を詳細に比較すると、新間氏が述べられるような「共通説話を持つ」という関係に留まらず、縁起絵巻が直接的に『巡拝記』に依拠して成立したといえる。以下、縁起絵巻甲類本と『巡拝記』の比較を通して、この依拠関係を明らかにする。

なお、縁起絵巻の現存最古の伝本は、次のような奥書を有する、甲類本に属する出光美術館蔵本（以下、出光本）である。

抑此縁起者以有由縁播磨国ヨリ借用之

元亨元年^{辛酉}十二月廿五日到來同^{壬戌}十一月十日卯日当

御縁日ニ此画写同事書者同十五日是又御縁日也

閑此心ヲ奉拝見者彌御誓憑ク覺テ落涙難

押者也後覽人々増々致信心奉仰当社権現

者現当之所願々満足者哉

于時元亨^{壬戌}元年十一月十五日未剋事書画写之

この奥書から出光本は、寛禪という僧侶が願主となり、播磨国から借用した絵巻を基に、元亨二（一三二二）年に制作された事が判明するが、制作された場所は不明である。また元亨元（一三二一）年には、出光本の原本となる縁起絵巻がすでに存在しているので、この年号を縁起絵巻の成立年代の下限とみたい。出光本は、甲類本の典型を示しており、なおかつ縁起絵巻現存最古の伝本であるため、本稿での考察は出光本の詞書に拠り行う。¹²⁾

三・八幡縁起絵巻の依拠資料について

ここから具体的に、縁起絵巻と『巡拝記』との依拠関係を指摘していきたい。

まず、下巻・第一段の「新羅国ノ大王ハ日本ノ犬ナリ」伝承を取り上げ、縁起絵巻と『巡拝記』との対応を確認したい。対照表2には、縁起絵巻と『巡拝記』の該当部分を挙げ、一致する箇所傍線を付し、縁起絵巻と『巡拝記』の関係により明らかにするため、類似する伝承を持つ『諸縁起』所収「八幡大菩薩御因位本縁起」¹³⁾（以下、「因位本縁起」）も挙げた。

対照表2に挙げたが、「因位本縁起」と『巡拝記』、縁起絵巻は、それぞれ異国の王が誓言を立てて、日本を守護す

ることを誓うという、同一の主題を語る部分は一致しているが、破線部で示した戦勝の碑を書き付ける場面は、「因位本縁起」と『巡拝記』、縁起絵巻では異なっている。「因位本縁起」では、「香椎大明神」が「厳石」に「日本国ノ犬」と書き付けたとして、戦勝の碑を書き付けた人物を香椎大明神とするのに対して、『巡拝記』では、戦勝の碑を書き付ける人物を、神功皇后の菩薩号である聖母大菩薩を示す「聖母」としており、神功皇后が戦勝の碑を書いたとする縁起絵巻の記述と一致する。さらに「因位本縁起」は、異国の名を「高麗国」とするが、『巡拝記』と縁起絵巻はともに「新羅国」とし、「因位本縁起」では、異国の大臣が誓言を行った後に、早珠を海に入れ、戦勝の碑を書き付けるという展開であるが、『巡拝記』と縁起絵巻では、大王が誓言を行った直後に、戦勝の碑を書き付けるという構成で、ここでも縁起絵巻と『巡拝記』は一致している。この結果、対照表2に示したように、『巡拝記』と縁起絵巻の伝承は、完全に一致しており、縁起絵巻が『巡拝記』に依拠して成立したのは明らかである。

対照表2に挙げた部分以外でも、縁起絵巻が『巡拝記』に依拠している部分がある。以下、やや煩雑ではあるが、基礎作業の一環として、対照表3に縁起絵巻が『巡拝記』に依拠している部分を挙げ、一致する箇所には傍線を付し

た。なお、対照表3-1は、縁起絵巻の上巻・第一段、3-2は上巻・第三段、3-3は上巻・第五段、3-4は下巻・第一段、3-5は下巻・第二段のそれぞれの該当部分である。

対照表3-1に挙げた部分は縁起絵巻の冒頭であるが、ここでも日本の神祇の始まりから応神天皇に至るまでの来歴を、縁起絵巻は『巡拝記』を引用して記している。対照表3-2は、異国との戦闘に際し、縁起絵巻は豊前国フナキ山で船を造ったとする部分であるが、この船木山の位置については、宮氏が

甲類本は豊前国とするのに対して、乙類本は長門国としている。……『八幡愚童訓』では「長門国ノ船木ノ山」となっており、乙類本と共通していることは興味がひかれるところである。

と、甲類本では豊前国、乙類本では『愚童訓』甲本と同じ長門国とあり、それぞれの系統で船木山の位置が異なる事を指摘されたが、この部分も対照表3-2から、甲類本は『巡拝記』の記述をそのまま引用したために、船木山の位置を「豊前国」としているのが判明する。また、宮氏が甲類本の詞書が未整理であると推定される根拠となった、「日本記云」や「或説云」などの、「原史料からの引用文が挿入された所」という部分も、甲類本が依拠した『巡拝

記』に、それらの資料名が見えている。対照表3-3では「此記文」、3-4では「日本記云」、3-5では「或云」「扶桑記云」などとあり、甲類本が直接、「日本記」や「或説」などの資料に依拠していたのではなく、『巡拝記』を介して、それらの伝承を引用している事も判明する。対照表3-6に挙げた下巻・第三段の応神天皇の八幡大菩薩への化現伝承に至っては、縁起絵巻は、ほぼ全てを『巡拝記』に依拠している。

以上、対照表3に縁起絵巻と『巡拝記』の一致する部分をまとめた。縁起絵巻の詞書は、『巡拝記』を直接的な依拠資料として成立しており、縁起絵巻で語られる神功皇后の三韓出兵や、応神天皇の八幡大菩薩への化現伝承など、八幡信仰をめぐる一連の伝承の基盤には、縁起絵巻の依拠資料である『巡拝記』の存在が大きい。ここでは、八幡信仰の展開における『巡拝記』の与えた影響にも留意しておきたい。

さて、縁起絵巻の依拠資料として『巡拝記』を指摘できたので、これにより縁起絵巻の成立年代もある程度、限定できる。宮氏は、縁起絵巻の成立年代を詞書の検討から、「一二二一年以降、若干年」とされたが、縁起絵巻の成立は、依拠資料である『巡拝記』編纂以後とみるべきであろう。つまり、『巡拝記』の成立年代は弘長年間（一二六一

—一二六四）から文永五（一二六八）年の間と推定されるので、この年代を縁起絵巻の成立年代の上限とし、現存最古の出光本の奥書から、元亨元（一三二一）年には、すでに出光本の原本が存在していたと見られるので、この年号を下限とする、弘長年間（一二六一）から、元亨元（一三二一）年までのおよそ六十年間を甲類本の成立年代とみたい。

四・『八幡宮寺巡拝記』以外の依拠資料をめぐる

前章では、縁起絵巻の依拠資料として『巡拝記』を指摘したが、縁起絵巻には『巡拝記』と一致しない詞書部分や、『巡拝記』には確認できない伝承もある。特に上巻では、神功皇后が三韓へ出兵する第一段や、牛窓の地名伝承を記す第二段、竜宮へ派遣する磯童を招来する第四段などに登場し、物語の展開において中心的役割を果たす住吉明神の伝承が『巡拝記』には見えない。また、下巻の第二段、第五段、第六段に記される、「シルシノ松」をめぐる宮崎宮の伝承も、縁起絵巻の記述は『巡拝記』より詳細に記されている。

これらの詞書部分も、先に確認した縁起絵巻と『巡拝記』の密接な依拠関係から、縁起絵巻が何らかの資料に依拠している可能性がある。本章では、これら『巡拝記』に

対照表 2

「因位本縁起」	『巡拝記』三話	縁起絵巻 下巻・第一段
<p>因之、彼国大臣人民等、立誓言云、我等此則日本国為犬、而守護彼日本、全以不可懈怠、若有敵心者、蒙天道之責者、爰随河上明神、以早珠入海給時仁、如本潮早畢、其時帝王歡喜、人民歡悅世利、其時香椎大明神、海岸乃巖石仁書付給、高麗国波日本国乃犬也、</p>	<p>彼ノ国ノ大王誓ヲ立テ、云ク、我等ハ則チ日本国ノ犬ト成テ、彼国ヲ守護セン、全ク懈怠アルヘカラス、若敵心アラハ、天道ノセメラ蒙ラント云、爰聖母石ノ上ニ新羅国ノ大王ハ日本ノ犬也トカキツケ給フ、日本ノ軍兵返テノチ、国ノ恥也トテ此石ノ文ヲケツルニ彌アサヤカニナル、葉ヲヌリテヤケトモ不叶シテ、今ニソノ文アリ、</p>	<p>其時彼ノ国ノ大王誓ヲ立テ云ク我等日本国ノ犬ト成テ彼国ヲ守護セム全ク懈怠アルヘカラス若敵心アラハ天道ノ責ヲ蒙ラムト云、爰皇后石ノ上ニ新羅国ノ大王ハ日本ノ犬ナリトカキツケ給フ日本ノ軍兵カヘリテ後国ノハチナリトテ此ノ石ノ文ヲケツルニイヨクアサヤカナリ葉ヲヌリテヤケトモカナワスシテ今ニ文アリト云々</p>

対照表 3-1

縁起絵巻 上巻・第一段	『巡拝記』一話
<p>夫我朝秋津島豊葦原中津国ニ昔天神七代地神五代已上十二代ハ皆神ノ御代也彼地神第五代神彦波瀲武鸕鷀草葺不合ノ尊ノ第二ノ御子神武天皇ト申ハ人代ノ始也彼帝ヨリ以来人王〔十〕六代御末応神天皇ト申ハ今ノ八幡大〔菩薩〕御事也</p>	<p>夫、我朝秋津島豊葦原ノ中津国天神七代ノ其後、地神第五ノ帝彦波瀲武鸕鷀草葺不合ノ尊ノ御子ノ神武天王ヨリ人王始リ給フ、今ノ大菩薩ハ十六代ノ応神天王也、</p>

対照表 3-2

縁起絵巻 上巻・第三段	『巡拝記』三話
<p>豊前国フナ木山ノ木ヲ切テ宇佐郡ニテ船四十八艘造リテ即鹿島ニテ乗船ノ軍兵一千三百七十五人也大將軍ニハ住吉并高良大臣也舵取ハ鹿島ノ大明神也</p>	<p>豊前国ノフナキ山ノ木ヲ切テ、宇佐ノ郡ニテ、船ヲツクル、鹿島ニテ三百七十五人ノリヌ、大將軍ニハ住吉并ニ高良ノ大臣、梶取ハ鹿島ノ明神、姓ハ安曇、名ハキヨマロ也、</p>

対照表 3-3

縁起絵巻 上巻・第五話

『巡拝記』三話

于時皇后暫津島ノ国ニ立依給フ彼所ニ白キ方ナル石アリ皇后大菩薩ヲ懷妊奉シニ此石ニ御腹ヲヒヤシテ若胎内ノ太子日本ノ主ト成ヘクハ今一月生ヘカラストコシラヘ給キ御記文ニハ此石ヲ我体ト思フヘシト^{云々}御腹ノ中ニ御坐ス皇子ニ被仰ケルハ吾異国ヲ打随カタメニ此マテ渡レリ汝必ス帰朝ノ後ウマレ給ヘトテ裳ノスソニ石ヲ裏テ御腰ニハサマセ給テ有シハ此石ノ事也

聖母シハラク対馬国ニ立寄給フ、彼所ニ白キ方ナル石アリ、聖母ハ大菩薩ヲハラミ奉リシニ、此石ニ御腹ヲヒヤシテ、若、ハラノ内ノ太子、日本ノ主ト成リ給フヘクハ、今一月生レ給フ事ナカレトコラヘ給キ、此記文ニハ此石ヲ我体ト思ヘト^{云々}御託宣ニ、石ヲ取テ御モノコシニサシハサムト云ハ、此石ノ事歟、

御方ノ船四十八艘乗船ノ軍兵一千三百七十五人也異国ノ兵船十萬八千艘軍兵四十九萬六千余人也彼国ノ国王大臣等嘲哂シテ云ク日本ハ賢キ国ナリケリ何ソ女人ヲ大將軍トスルヤ

時ニ御方ハ四十八艘ニ三百七十五人ノレリ、異国ハ十萬八千艘ニ、四十九萬六千余人ノレリ、異国ノ王臣嘲哂シテ云ク、日本ハカシコキ国也、イカンシテ女人ヲ大將軍トスルヤ、

或縁起云肥前国佐嘉郡ニ御坐ス河上ノ宮ニ彼ノ二ノ玉ハ納マル長サ五寸計頭ハ二寸計也尾ハホソキ玉也

此二玉ハ河上ノ宮ニオサマル、長五寸ハカリ也、カシラハ二寸ハカリ也、尾ソホソシ。

対照表 3-4

縁起絵巻 下巻・第一段

『巡拝記』三話

其後皇后宮彼国ヲ討随テ筑前国ニ還著給テ十日ト申スニ鵜ノ羽ヲモテウフヤヲ造リ給テ槐ノ木ニ取り付セ給テ皇子ヲウミ奉リシ間彼所ヲハウミノ宮ト名付ケタリ今ノ宇佐ノ宮

聖母返リ給テ十日ト申ニ、筑前国ニシテ大菩薩ヲウミ給フ、今ノ宇美ノ宮是也、

対照表 315

<p>其後皇后宮彼国ヲ討隨テ筑前国ニ還著給テ十日ト申スニ鵜ノ羽ヲモテウフヤヲ造リ給テ槐ノ木ニ取り付セ給テ皇子ヲウミ奉リシ間彼所ヲハウミノ宮ト名付ケタリ今ノ宇佐ノ宮</p>	<p>サテ日本記云皇后ノツキ給ヘル御鉾ヲ新羅ノ王ノ門ニ立ラレテ後ノ世ノシルシトスル故ニ其御鉾ヲ今ニ新羅ノ王門ニ立テリサテモ明ル年ノ春二月ニ皇后都ヘ向ヒ御坐スカコサカノ王^兄也^也シクマノ王^弟也^也皇子ノ都ヘ向給フ事ヲ聞テヒソカニタハカリマツ皇后此由ヲ聞食テ武内ノ宿禰ニ王子ヲイタカセ奉テ南海ヨリ紀伊国ミナトヘツカセ給フ皇后ノ御船ハ難波ヲサシテワタリ給フ其後武内ノ宿禰彼王達ヲウツト^云其後如ク約束ノ成テ竜王ノ聶ト備後国ニテ若宮ヲウミ給フ</p> <p>又皇后ノ異国ヲセメ給シ時御裳ハ今ノ宇佐ノ弥勒寺ニヲサマレリ色モ文モナヲアサヤカナリ</p>	<p>縁起絵巻 下巻・第二段</p> <p>日本記云仲哀天皇御宇九年ノ春二月天皇崩御シ給フ^云或説云眼ノ当異国ノ矢ニアタリテ崩御シ給フ^云倭ニ天皇ノ骸ヲ武内ノ宿禰海路ヨリ長門国豊浦ノ宮ヘ送ル末々天皇葬ヲシ奉ラス扶桑記云神功皇后位ニ付給テ其年御葬ヲ河内国長野山ニウツス^云々</p>
<p>聖母返リ給テ十日ト申ニ、筑前国ニシテ大菩薩ヲウミ給フ、今ノ宇美ノ宮是也、</p>	<p>日本記云、皇后ノツキ給ヘル御鉾ヲ新羅ノ王ノ門ニ立テ、後世ノシルシトスルカ故ニ、其ノ鉾今ニ王ノ門立リ、新羅ヲ打テアクル年ノ春二月ニ、皇后都ヘノホリマシマスニ、カコサカノ王^兄也^也シクマノ王^弟也^也皇子ノイテキ給エル事ヲキ、テ、ヒソカニタハカリ待、皇后是ヲキ、給テ、武内ノ宿禰ニ皇子ヲイタカセテ、南海ヨリ紀伊国ノ湊ヘウツス、皇子ノ御船ハ難波ヲサシテツキス、其後、武内ノ宿禰彼ノ兄弟ノ王ヲウツト^云其後約束ノ如ク竜王ノムコト成リ給テ、備後国ニテ若宮ヲウミ給フ、</p> <p>異国セメ給シ時ノ御裳、今ニ宇佐ノ弥勒寺ニヲサメラレタリ、色モ文モナヲアサヤカナリ</p>	<p>『巡拝記』三話</p> <p>仲哀ノ御宇九年ノ春二月、天皇崩シ給キ、或云親アタリ異国ノ矢ニ当テ崩ジ給フ、云竊ニ御戸ヲ、武内ノ武内ノ宿禰海路ヨリ、長門国豊浦ノ宮ヘオクル、末々天皇ノ葬ヲナスコトエス、扶桑記云、神功皇后位ニツキ給テ、其年仲哀天皇ノ葬ヲ河内国長野ノ山ニウツスト^云々</p>

縁起絵巻 下巻・第三段

<p>人皇第三十代欽明天皇位ニ付給テ十二年ニアタリテ始テ神明トアラハレ給フ大宮司補任帳ニハ僧聴三年トモ云豊前国宇佐郡蓮台寺山ノフモトニ谷ノラクニカチスル翁アリソノ相貌甚タ奇異也大神比類是ヲミツケテ只人ニアラスト思テ五穀ヲタテ三年之間給仕シテ後御幣ヲ祈請シテ云ク我三年マテ五穀タチ籠居シテ給仕シツル其相貌只人ニハアラサルニヨテナリ若神ナラハ我前ニアラハレ給ヘ此時翁失テ三歳ノ小兒トアラハレテ竹ノ葉ニ立給テ託宣シテノ給ハク我ハ日本人王十六代ノ誉田天王ナリ我ヲハ護国靈驗威力神通大自在王菩薩ト云ナリ国々所々ニ跡ヲ神明ニ垂給テアラハシマシマスナリ^{云々}</p> <p>其後馬城ノ峰ニ石体権現トアラハレ給フ大足姫比咩ノ大神諸共二三所並テ御坐スナリ高一丈四五尺広一丈ハカリニテアラハレ給フ寒雪ノコロ御体ナラアタ、カニ御坐スナリ但シ人恐ラナシテ近付奉ル事ナシ御殿ヲ造覆ケルニ御託宣アリテ我石体ニアラワル、事ハ末代ニイタテヒサシカラムカタメナリコノ風ニアタリ此流ヲ呑ム物罪障ヲ滅スヘシ御殿ヲ造覆フ事ナカレ^{云々}</p>	<p>『巡拝記』七話</p> <p>宇佐宮第三十代欽明天皇位ニツキ給テ、第十六代アタリテ始テ神明トアラハレ給フ、大宮司補任帳ニハ、僧聴三年ト云リ、其ノ由来ヲ尋ヌレハ、豊前国宇佐郡蓮台寺ノフモトノ谷オクニカチスル翁アリ、其相貌甚奇異也、大神ノ比類コレヲ見ツケテ、タ、人ニアラスト思テ、五穀ヲタチテ、三年間給仕シテ、後ニ御幣ヲ捧テ祈請シテ云、我三季マテキウシ、ツル事ハ、ソノ相貌ハ頭ハアリ、タ、人ニアラサルニヨリテ也、若神ナラハ我マヘニアラハレ給ヘト、此時ウセテ三歳ノ小兒トアラハレテ、竹ノ葉ニ立給テ託宣シテノ給ク、我ハ日本ノ人王十六代ノ誉田ノ天皇也、我ハ護国靈驗威力神通大自在王菩薩ト云也、国々所々跡ヲ神明ニ垂ル、始テアラハレマシマス也、則相ツ、キテ馬城ノ峰ニ石体権現トアラハレ給フ、大足姫比咩大神モロトモ二三所ナラヒマシマス也、高サハ一丈四五尺、広サハ一丈ハカリニテアラハレ給フ、寒冬ノ雪ノ比、御体ナラアタ、カニマシマス也、御殿ヲ作オホヒケルニ御託宣アリテ、ソレ石体トアラハル、事、末代ニイタルマテ久カラシメ也、此風ニアタリ、此流ヲノマンモノ、罪障ヲ滅スヘシ、御殿ヲ作オホフ事ナカレ、</p>
---	--

見えない縁起絵巻の伝承について検討したい。

対照表 4 には、『巡拝記』と相違する縁起絵巻の宮崎宮伝承を挙げた。

縁起絵巻と『巡拝記』では、傍線部分の宮崎の地名由来

については一致しているが、破線部で示した、宮崎宮での八幡大菩薩の託宣内容は一致しない。縁起絵巻は、『巡拝記』に見えない「二階ノ楼門」に関して記しており、この宮崎宮の社殿の構造に関しては、縁起絵巻が『巡拝記』以

縁起絵巻 下巻・第六段

我天下ノ国土ヲ守護セシ始戒定恵ノ箱ヲ埋テシルシノ松ヲ立テ
キ故ニ彼所ヲ八幡崎ト名付其松ノ本ノニハ八ノ幡フリタリキ其
ノ故ヲ以テ八幡大菩薩彼所ニイワウヘキナリ我御殿ノ正方ヲハ
戌亥ノ角ニ向テ九間ニ是ヲ造シ石スエノ石ノ上ニハ異国ノ敵ノ
名ヲカクヘシ是則異国降伏ノタメナリ内廊外廊ヲハ二陳ニ造テ
フキアワセニフキニ階ノ樓門ヲ立ヨ内廊ハ諸神集会ノタメ外廊
ハ被覆修行物ノ料ニ階ノ樓門ハ王位威勢ヲトロヘ人民力衰タラ
ム時キ定テ彼ノ怨敵出来ラン時我彼樓門ニ昇テ彼ノ敵ヲフセク
ヘシ

『巡拝記』四話

メノ故ハ、昔天下国土ヲ鎮護セシ始メ、戒定恵ノ三学ノ筈ヲ、
彼松原ニウツミヲキシ故也、ソノ地ヲ宮崎ト号スル也、抑真材、
先年、石清水ノ宮ニ參テ八幡宮ノ廊ヲ作テ可進ヨシ立願セシ也、
汝、早宮崎ノ新宮ヲ作ヘシ、ソノツクルヘキヤウハ、新羅国ニ
向ヘテ西面ニスヘシ、内廊ノ左右ニハ護法神ヲ安ヘシ、外廊ノ
南北ニハ往来ノ修行者ヲ寄宿セシメヨ、新羅国ハ我古敵也、依
之新宮ノツメ石ハシノシタニ、敵国降伏ノヨシヲ事ツクヘシ、
其宮殿梁柱ニハ栢可用、如此セハ彼国自然カウフクシナン、

外の資料を参考にしたと考えられる。また、縁起絵巻下巻
には、この他にも『巡拝記』に見えない、いくつかの宮崎
宮関連の伝承を記しているが、それらの記述が何に依拠し
ているかは不明であり、今後の課題としたい。

なお、縁起絵巻が制作された当時の宮崎宮の状況につい
て、ひとつ指摘しておきたい。先に縁起絵巻の成立年代を、
『巡拝記』が編纂された弘長年間（一二六一）から元亨元
（一二三二）年までの間としたが、縁起絵巻の成立とほぼ
同じくする、文永二（一二六五）年二月二十一日に、宮崎
宮の社殿は火災により焼失している。この火災で、宮崎宮
は社殿を焼失したが、縁起絵巻の詞書には、宮崎宮の社殿

は延喜三十一（九二二）年の造宮から「宝社造営ヨリ以来
タ三百余歳ニ及ヘリ」と、三百年余りの歴史を伝えている
と記すのみで、宮崎宮の社殿焼失については全く触れてい
ない。縁起絵巻の中の宮崎宮は、八幡大菩薩が「戒定恵
ノ箱」を埋めた霊地であり、異国からの襲来に際し、八幡
大菩薩が日本を守護するための重要な場所であるとする。
縁起絵巻の八幡大菩薩の託宣は、宮崎宮が異国との戦闘の
最前線であつた時代背景とも重なっている。

さて、この宮崎宮関係の伝承以外で『巡拝記』に見えな
い部分として、上巻に描かれる住吉明神伝承が挙げられる。
縁起絵巻に住吉明神伝承が記される背景として、当時の住

吉信仰の隆盛を挙げる論考もあるが、本稿では、縁起絵巻と類似する住吉明神関係の伝承を指摘したい。

縁起絵巻で語られる住吉明神伝承のうち、『巡拝記』にも見えるものとしては、異国との戦闘で使用する干珠・満珠を借用するために、竜宮へ使者を派遣するという伝承（以下、竜宮派遣伝承）がある。この竜宮派遣伝承は、『因位本縁起』にも記されており、『巡拝記』は「因位本縁起」の伝承と共通する。縁起絵巻の竜宮派遣伝承は、『巡拝記』とは異なる独自の伝承を有しているが、縁起絵巻の竜宮派遣伝承と類似する伝承を、石清水八幡宮の社僧であった田中宗清が、建保二（一二一四）年頃に編纂したという『宮寺縁事抄』（以下、『縁事抄』）という資料が載せている。¹⁶『縁事抄』は、『諸縁起』にも見える「因位本縁起」を所収しているが、この「因位本縁起」に付説する形で、「或説云」として、縁起絵巻と類似する伝承を載せる。対照表5に、『縁事抄』に引かれる「或説云」の全文を挙げ、比較のために『巡拝記』と縁起絵巻の該当部分を示した。

対照表5に示したが、『巡拝記』では竜宮へ派遣されるのは、点線部のように「河上ノ大明神」、また「阿蘇縁起」では「方士遣」ともするが、縁起絵巻と「或説」では、『巡拝記』と異なり、竜宮へ派遣する人物を傍線部で示し

た「アムトムノ磯童」（安曇イソラ）とする点で一致しており、縁起絵巻と「或説」が、神功皇后と住吉明神の間答によって物語を進行させる形式も共通する。さらに磯童を招来するために、海中（海上）に舞台を設けて、舞楽を奏するという点も、縁起絵巻と「或説」は一致する。この対照表5から、縁起絵巻の竜宮派遣伝承は『巡拝記』ではなく、『縁事抄』『或説』と類似していることが判明するが、『縁事抄』を編纂した田中宗清は、この「或説」を「不審説也、不可用歟」と評しており、縁起絵巻が石清水八幡宮で「不審」とされた「或説」と共通する点は、縁起絵巻の制作圏を考察するための手掛かりとして注意しておきたい。

以上、本稿では、縁起絵巻の成立をめぐり、その詞書の依拠資料の検討を行い、甲類本の詞書の依拠資料が『巡拝記』であることを明らかにした。本稿では、八幡信仰の拡大に大きな役割を果たした縁起絵巻の成立、諸本の展開を考察するための基礎研究として、縁起絵巻甲類本の詞書の依拠資料のひとつに、八幡宮関係の説話を集成して編纂された『巡拝記』を指摘したにすぎないが、本稿を今後の八幡縁起絵巻全体の諸問題を解明するための第一歩としたい。

『巡拝記』三話		縁起絵巻 上巻・第四段		『縁事抄』「或説」	
<p>其後河上大明神聖母龍宮、阿蘇縁起ニハ方士遣ト云々、云ク我ハラメル子ハ男子也、太子ヲムコニ奉ラン、其ノ情ニ乾珠、并ニ満珠、借給トコヒ給フニ、河上ノ大明神三日ヲヘテ、二ノ玉ヲ持テ来ル、</p>		<p>是ヨリ西ニ鹿ノ浜ト申所候彼ノ島ニアムトムノ磯童ト申者アリ件ノ童ヲ召テ竜宮城ニ遣シテ旱珠満珠ト申ス二ノ玉ヲ令借給ヘ此二ノ玉タニモ候ハ、彼国ヲ打隨ヘ御坐サム事イト安事ニ候ト申ス其時皇后被仰ケルハ件童ヲハ何カシテ可召ソト被仰之時老人申サク此童ハセイナウト申ス舞ヲ殊ニ愛シ持ルナリ此舞ヲハ又ハナ、舞トモ申ナリ其時但シ彼舞ヲハ誰人カ可舞成ト仰アリケレハ海中ニ舞台ヲ構テ此老人彼ノ舞ヲ舞スマシケリ</p>		<p>神功皇后ニ住吉大明神申ヲハ君沙伽羅龍王之女也、異国速可征伐也、而龍宮干玉可申請也云々、皇后被仰曰、我然也、但以誰人爲使遣之乎、明神重申給ハク、安曇イソヲヲ可遣使也、皇后仰曰、何爾ニシテカ件物ヲ可召乎、明神申云、件物楽好者也、楽セ給給サセハ、自然ニ可出来云々、因之於海上令調伎楽御磯等参来、</p>	
		上巻・第五段		<p>即以件人遣龍宮之處、帰来申云、件玉自是差専使、可奉之由云々、爾時自海中生毛乎、指出二果玉奉之、以此玉之征伐新羅国御云々、</p>	

注

(1) 主な諸本については、松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』、三省堂、一九八二年)、白杵華臣「防長の八幡縁起絵巻について」(神道大系編纂会編『神道大系 月報 89 安芸・周

防・長門国』一九八九年)、梅津次郎監修『角川 絵巻物総覧』(角川書店、一九九五年)、徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版、二〇〇二年)、など参照。
(2) 重松明久『八幡宇佐宮御託宣集』(現代思想社、一九八六年)に拠る。

- (3) 西田長男「八幡愚童訓」(『群書解題 第一卷 中』統群書類従完成会、一九六二年)。
- (4) 小助川元太「京都国立博物館蔵行書寫本『八幡宮愚童記秘卷』(翻刻)」(『唱導文学研究 第六集』、三弥井書店、二〇〇八年)に拠る。
- (5) 新聞進一『歌謡史の研究 その一 今様考』(至文堂、一九四七年)。
- (6) 近藤喜博「八幡宮寺巡拝記 解説」(『中世神仏説話』、古典文庫、一九五〇年)。なお、本稿で使用する『八幡宮寺巡拝記』の本文は本書所収本に拠る。
- (7) 新城敏男「中世八幡信仰の一考察 ―『八幡愚童訓』の成立と性格―」(中野幡能編『民衆宗教史叢書 第二卷 八幡信仰』雄山閣出版、一九八三年)。
- (8) 宮次男「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起(上・中・下)」(『美術研究』第333号・第335号・第336号、一九八五年九月、一九八六年三月、一九八六年八月)。
- (9) 久保田収「中世における神功皇后観」(神功皇后論文集刊行会編『神功皇后』、皇学館大学出版会、一九七二年)。
- (10) 金光哲「研究ノート『八幡縁起絵巻』―八幡大菩薩御縁起と足利義教奉納絵巻―」(『東アジア研究』第18号、一九九七年、一二月)。
- (11) 新聞水緒「八幡縁起類と八幡愚童訓甲本」(『神仏説話と説話集の研究』、清文堂、二〇〇八年)。
- (12) 出光本の欠字部分は、宮次男「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 附載二」(『美術研究』第340号、一九八七年十一月)の甲類本翻刻で補い、補った部分を「」で示した。
- (13) 高橋啓三編『石清水史料叢書二 縁起・託宣・告文』(石清水八幡宮社務所、一九七六年) 所収本に拠る。
- (14) 廣渡正利編校訂『管崎宮史』(文獻出版、一九九九年)。
- (15) 新聞水緒「八幡神説話におけるホムダワケノミコト―八幡愚童訓の周辺を視座において―」(『季刊 第二次 悠久』第121号、二〇一〇年八月)。
- (16) 『神道大系 神社編七 石清水』(神道大系編纂会、一九八八年) 所収本に拠る。